

北京より多倫まで (二)

小牧實繁

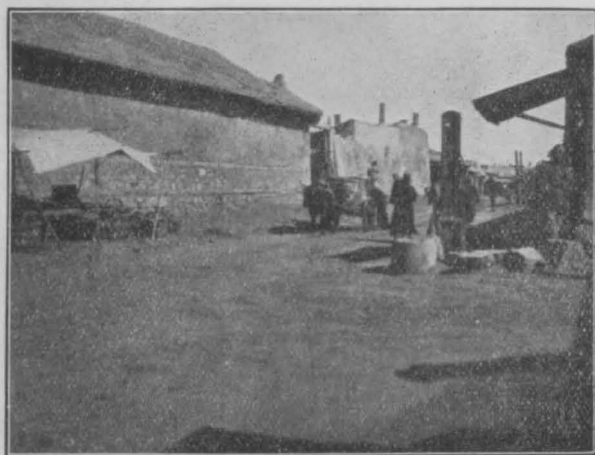
四月十五日、火曜日、快晴。七時半起床、八時朝食。主人拉氏から龍骨と稱するものを見せられる。可なり大きな哺乳動物の腰椎骨で、半化石の情態にある。

九時一人の蒙古人を人夫として連れ拉氏公館を出る。砂丘方面の探査が目的である。

多倫の街の中では水を運搬する牛車(第十五圖)下水のある街、鋤を鑄る鍛冶屋(第十六圖)等を珍らしく思ひ寫眞する。

多倫西南郊には恐ろしく泥炭質の濕地がある第十七圖は之れを示す。之を越すと砂丘がある此の砂丘は南沙梁と云ふが、正に模式的の砂丘である。砂丘には殆んど樹木がないが、有れば多くは柳である。之れが燃料として使用せられるのである。第十八圖は此の柳を有する砂丘

第五十圖



を示す江上君はその中で兎に出くはしたと云ふ又砂丘中に偶々泥炭の露出した所がありその深

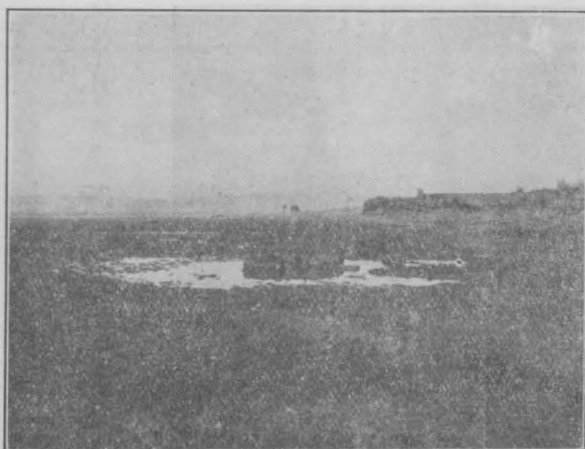
圖六十第



地點附近に至り探査の末多數の石器類を發見した。玉井氏は *in situ* で泥炭層上部中より一個の石器を發見せられた。他の石器は何れも表面採集であるけれども皆泥炭層上にあり、此所が

さは一尺以上にも及んで居る。嘗ての沼の中に堆積したものであらう。 昨朝 石器材料を發見した

圖七十第



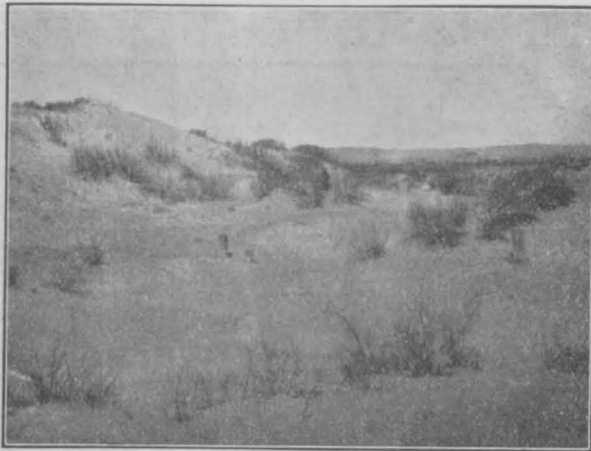
石器時代遺跡たることは愈々確かとなつたので遺跡の寫真(第十九、二十圖)をとつたり、地層の斷面圖(第二十一圖)を作つたりする。遺跡は喇嘛西廟から南二十度東に當る。

十二 時持參の麵麩で中食をする。吹き荒れる風の爲砂粒が飛んで麵麩に着く。絶えず砂を噛みながら

も、併し多くの石器を發見し得た喜びが一座の人々の面上に讀める。

中食を濟ませて、それより東南の泥炭層露出地に至り、又多くの石器を採集する。此所を前

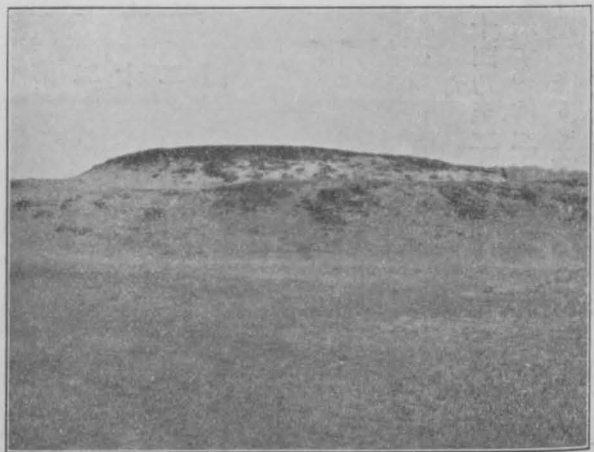
圖 八 十 第



記の第一遺跡から區別して第二遺跡と呼んで置く。第二十二圖は第二遺跡の全景を示す。第二遺跡か

北京より多倫まで

圖 九 十 第



より砂丘に登り、傾斜の角度を測定する。風向側は十二度、風下側は下邊に於いて二十九度、上縁に於て三十五度の傾斜を示す。半摺鉢形を呈する風下側を所々に見る。此所の砂丘は大體

ら北上して尙多くの石器を發見する。此所の遺跡は非常に廣大な地域に亘ることが知られる。それ

圖 十 二 第

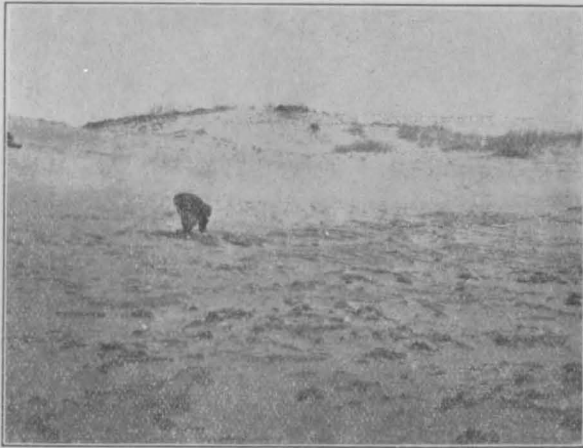


圖 一 十 二 第

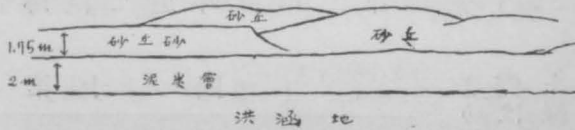


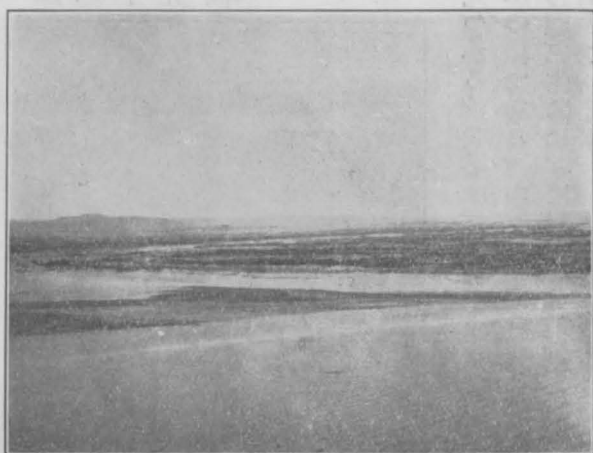
圖 二 十 二 第



バルハン型砂丘の複合したものかと思はれる。寫眞を多數に撮影した。その一例を第二十三圖乃至第二十五圖に示す。第二十三圖は砂丘より多倫東郊の多少耕地の開けた方面を望んだ所、

第二十四乃至第二十五圖はバルハン型砂丘の風下側を示す。第二十五圖の遠景は多倫の町である。砂丘を降りて南下し、元の第二遺跡に至り断面圖(第二十六圖)を作りながら地層を検したの

圖三十二第

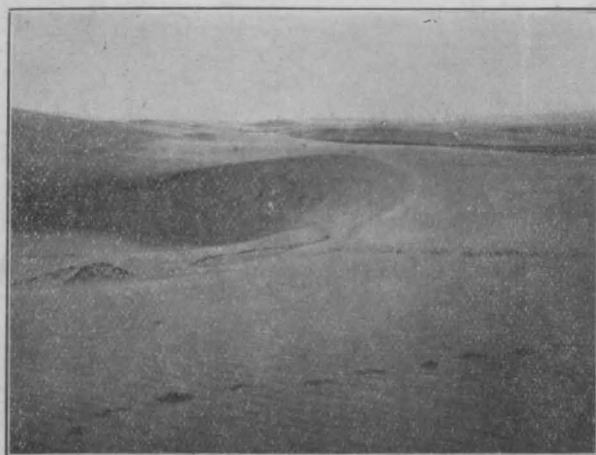


であるけれども、他の砂は明かに流水中沈積の砂であつて、砂丘砂ではない。此所に交互に流水及び潜水の存在したことは明かである。然し勿論その潜水の原因は砂丘の前進又は後退であ

北京より多倫まで

であるが、最上の黒色泥炭質砂、次の灰白色曹達質砂、次の灰色曹達質砂、最下の泥炭は沼澤性のもの

圖四十二第



つたことは明かであらう。第二遺跡から更に南下するに、尙多くの泥炭層が露出し、此所に又多くの石器が連続的に発見せられる。而して不思議なことには段丘下の

洪涵原より餘り隔らない地に於ても多くの石器が発見せられるのである斯くて我等のトレーサした

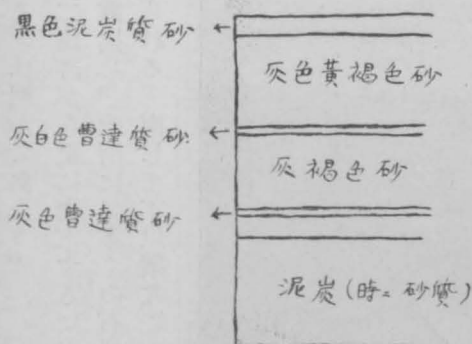
圖五十二第



見つかる。我等は夢の中で無盡の寶でも掘出す
かの様である。中々家路を思ふ所ではない。然
し顧先生は切りに歸らうと促す。馬賊の心配か
らだなど氣着くと、我等も餘り長く無防禦の野

丈けても此の遺跡は南北五町以上
に亘る未だ時間
は四時である。
日は低くはな
い。石器は幾
等でも

圖六十二第



招かうともなる失敗を
しては如何
持出さうと
る。之れを
に懲りて居
張家口事件
たが、第一
々々であつ
欲しいは山
かである。
ることは確

外に止る氣にはなれない。石器に氣を引かれな
がら、然し多くの例を採集し得た喜びを感じな
がら戦勝の勇士でもあるかのような氣持で歸路
に就き、五時前拉氏公館に歸る。
石器の外に人骨は可なり豊富に認められた。
よし石器時代のものではなく時代の新しいも
のであるにしても、人類學上の貴重な材料とな

測られぬ。残念ながら、此等白骨をその埋められた元の所へそのまま、残して歸つたのである。此の人骨が案外多數に露出して居る理由は之れを覆つた砂が風のため吹去られたにある。

六時出でて清真飯店に至り夕食をする。此の家には家禽として家鴨、雞等を飼つて居り、燃料としては矢張木炭、柳枝、牛糞を用ふるらしく、之れを畜へて居るのを見る。土俗品として興味あるものには全部木製の鋤がある。

食後市内を散歩する。喇嘛糕なる



菓子（月餅）の廣告が甘黨の好奇心を唆るが、不幸品切れである。然し月餅（yueh pin）などの名物を買つて拉氏公館に歸り、八時からランプの下で石器類の整理などし、十時過就寢。

四月十六日、水曜日、晴。七時半起床、八時持參の麵麩で朝食する。食後宿舍の前で記念撮影する。上流蒙古人の家屋の一斑が此の寫眞（第二十七圖）で解る譯である。それより清真飯店に至り辨當を作らしめ、汽車站に至り明日の

圖 七 十 二 第



自動車の交渉をなし置き、十時半一旦拉氏公館に歸り玉井氏が記念撮影をする。

十一時出發喇嘛西廟の裏手なる三沙梁に至る矢張石器の探索が目的である。水無川の河床を

行くと其處に多くの石器材料が散布して居る。多くは碧玉、玉髓、瑪瑙等である遺跡發見の望みは充

第二十八圖



分出來たのであるが、但石器は一も存在せず失望を禁じ得ない。

最後の手段として三沙梁の最頂上に登り行先を見定め、地形を相した上で石器を探索するに決する。處が此の下に第二十八圖の様な地層の現れた所があり、有望らしいので行つて見る。Aは黄色粘土質砂層であるが之れは恐らく更新期に屬するものであらうと思はれ、假りにその時代は不明であるとしても地形上前述の水無川の堆積したものであることは明かである。此れより一段下(I)に灰褐乃至黒褐色の地層が現れるがA断面とI断面との間は凹地をなして凹地は川の方へ少しく傾斜する。そして此の凹地上に無數の石器を發見したのである。打製石斧、磨製石斧

石鏃等が主なるものであるが、玉井氏は此の中から一個の銅鏃を發見せられた。實に遺物の豊富な遺跡である。その正確な位置は喇嘛西廟の北二十度東である。尙I断面とII断面との間も凹地をなしII断面の方に傾斜し、II断面の下も凹地をなして下方川の方に傾斜して居るが、此等の凹地には殆んど石器は發見せられなかつた。烈風の吹き荒む中に流沙に當りながら四時十五分前まで夢中になつて石器類を採集する。石器採集が目的であるならば恐らく此所は世界に於ける石器時代遺跡中の極樂、石器の無盡藏とも云ひ得るであらう。石器は實に無數に存在する。そして夢中になつて之れを拾ふことが出来る。

綠、赤、黃、白、色とりどりの石器が砂の中に光る。意の儘に拾へる。唯人手が足りぬ。そして約東の四時が來た。顧先生は引上げる様にとの相圖をする。石器も欲しいが馬賊も恐ろしい、後に心を引かれながらも引擧げることとす

る。然し石器は大分採集出來た。嬉しい。そう思ふと今度は馬賊が出やしないかと云ふ事が大分心配になる。夕方は追々に迫る。風は相變らず吹く、砂は飛ぶ。丘越しの向ふでは何かしら煙の様なものが上つて先刻來石器採集中も多少氣にかゝらぬではなかつた。顧先生も島村氏も玉井氏も大分先の方まで歸つて居る。後に残つたのは石器採集に夢中であつた水野、駒井、江上の三君と自分と四人である。そして金縁の眼鏡を掛けたのは自分一人である。人質になる可能性の多いのは自分である。こんな事が氣になつた。

四時頃である。一番敏感らしい自分がふと後をふり返つた。今まで人影だに見えなかつた緩やかな丘の上の峠に騎馬の群が見えるではないか、そして何かしら黒い影がうよ／＼と見える實際何かと思つた。そして思はず「あれ何だろ」と叫んだ。三人は振返つた、そして物をも云はず一目散に喇嘛廟目がけて驅け出したのである

追着かれるのは必定とは思ひながら、そしてそれが今か今かと恐れながら。

然しながら心臓の働きには限りがある。そう馳けられるものではない。殊に自分は三人の若者には敵はぬ。もう息は續かない。心臓麻痺で行くか馬賊の人質となるか一途あるのみ。生れて未だこんなに力走したことはない、人力は盡した、馬賊の人質とならう、こう観念した。観念すれば靜觀出來る。不思議に彈丸は飛んで來ない。騎馬の足音も案外近づかぬ、そして一人の百姓らしいのが我等の前面を悠々と歩いて居るではないか、馬賊は百姓に無關心であるかも知れない、然し島村氏も顧先生も玉井氏も案外呑氣相に我等の驅けるのを見て居る、危険の迫つたのを感じる様には見えない、遠望でよくは解らないが、三君が如何に眞剣に走るかを見ながら、自分は到底も敵はぬと思ひ、不圖又後を見た。今度は靜かに見えたのである。それは騎馬の蒙古人に伴はれた牛の群であつた。

然しその時の氣持は到底も言葉では云ひ表はされぬ。胸撫で下した等云ふ呑氣なことではない。生命を拾つたと云ふ思ひである。そして餘程しつかりしなければ安心のため却て其處にばつたり倒れたかも知れない。あのふらふらする脚で幅一間ばかりの溝を駆け越えた時の苦しかったこと、恐らく此れは一生忘れることが出来ないであらう。

五時無事拉氏公館に歸り小憩、五時半清眞に至り夕食、七時終り、歸つて石器類の整理や荷物整理やをなし九時就寢。恐ろしい然し面白い一日であつた。

四月十七日、木曜日、晴。午前四時半起床、五時過拉氏の好意により米の御飯を戴く。蒙古人が別れる人に食事を出すのは特別待遇の好意によるのだと云ふ。五時の朝食を出す爲めには拉氏の奥方は昨夜から徹夜であつたらしい厚く拉氏の好意を謝しつゝ、難有く戴く。又何時遭へるかと思ふと別離の情に堪えない。六時十分汽

第九十二圖



車站に至り直ちに乗車多倫を去る。一行十九人で矢張り狭苦しい。

途中、野生の狼、黄羊、灰鶴、等を見る。

十一時四十分馬拉蓋廟着、中食。十二時二十

分馬拉

蓋廟發

三時十

分張北

縣着。

張北縣

では沼

地の泥

を採り

之れを

框に入

れて形

を作り

天日で

乾して

瓦に製するのを見る。氣候が乾燥して居ればこそである。第二十九圖は天日製瓦を示す。

五時十五分萬全縣着。萬全縣の手前で地形は一變して蒙古らしくなくなる。萬全縣の城壁は廢墟の如く壞れて「國敗れて」の感をさへ起させる。川の沿岸は赤色と白色の水成岩の互層よりなつて居る。

萬全縣より張家口に近く、再堆積黃土の中に家居した聚落がある。再堆積らしいが此の黃土は可なり厚層をなし丘陵を形成して居る。土地では黃土稜と稱せられる。岩石よりなる峽谷は即ち水關で亦絶境と稱することが出来る。

六時二十分張家口西站に着、荷物の検査はあつたが、心配した程嚴重なものではない。七時日本旅館に歸り、洗面、剃鬚、化粧して蘇生の思ひをする。迎へて呉れた女中おはるさんの顔も今日は特に美しく優しく見えた。時に七時半である。

山崎領事、盛島翁と共に夕食する。十一時過

北京より多倫まで

兩氏は馬車で歸られ、十二時疲れて就寢。夕食中、盛島翁より聞いた談話を左に録する。

蒙古の子供は帶を緊めて角力をして遊ぶ、又馬糞を積んで的となし弓を射て遊ぶ、又琴は日本の琴と似たものを用ひる。蒙古人は祭の時廟に集り弓、競馬、角力等を催し、競技は約一週間も續く。

蒙古に於ける支那の移民は近年不作のため子を賣り又は乞食となるものが多い、或村では一家一兒以外は棄てる内規を作つた所がある、包頭附近でも三、四萬人の賣子があつた。此等支那人の耕作するものは、麥、粟、高粱、であるが、之等は全體四月終りに植え八月末に收穫するのである。

蒙古人の刑罰に、盗人をして寒夜手足を蒙古包の外に出さしめ凍症に罹らせて落すことがある。大正四年河套で王の墓を發いたものの足の^{くみぶし}踝を破り之を油の燈で焼き悶死せしめる刑罰を見た。又大正八年庫倫で強盜、殺人、強姦の

罪人の皮を剥ぎ腹を割き手足を切り最後に頭を切る刑罰を見た(寫眞を有せらる)と。

外蒙と内蒙とは人種は同一であるが、外蒙の方が人情は朴訥である。

蒙古人の遊牧は即ち牧草を求めて移動するものであるけれども、その移動すべき土地は大體定まつて居る夏は山の上、冬は山の陰を求めて移動し、餘り突飛な遠方へは行かぬ。聚落としては廟のある村ならば時として數百の戸數を有するが一軒か二軒よりなる村もあり一定しない分家の時は包を分ち羊馬等をも分配すると。

以上が蒙古通盛島翁の談話の要領である。

四月十八日、金曜日、快晴、靜穩。餘程疲れたものらしい、眼を覺すと十一時である。十二時前、朝食。天氣は到底も快く穩かで、張家口に居るなどとは思はれぬ位である。

一時領事館に山崎領事を訪れ、先般張家口北郊にて發見の遺物を整理し、保管及び發送方を御願する。

氏の談に張家口は夏は案外涼しい、七月頃雨が降るが九月十月は旅行の好季節であると。二時半一旦宿に歸り、それから盛島翁を訪れる氏の談話を左に録す。

ハイラルの南八十四里(日本の四十里)興安嶺の附近に溫泉があり、攝氏零度より四十度迄の溫度を有するものが列をなして連なり、白樺の皮で天幕を作り浴湯に便す。

ハイラル、ケルン附近に碧玉の石器材料らしいものがある、又庫倫とウトとの間にも碧玉髓等の石器材料らしいものがある(氏は之れを所有せらる)

ウランハイには石綿、岩鹽、砂金を産する。庫倫に至る間には多くのノール(nor)が在り鹽を産する。蒙古人は鹽の結晶を以て神の業と考へ不淨を忌むので支那人のノールに入ることは絶対に許さない。

蒙古では地的條件の特徴をとつて地名とする清朝時代外蒙古の人口は六十萬位であつたと

推定せしめる記録がある、現在外蒙古の人口は約百萬位と考へられるが正確には知り難い。

以上が盛島翁の談話の要領である。五時半盛島翁方を辭し顧先生を訪れる。顧先生は盛島翁夫人の親戚らしい。顧先生の談話を左に録す。

多倫からの歸途狼が自働車の前途を横切つたが之れは支那では縁起の悪いことと考へられて居る、(小牧曰、余の生國近江邊でも動物、殊にイタチが道を横ぎるのは不吉の兆と考へられて居る)そのため随分心配したが無事であつて嬉しかつた。

張家口に亞米利加人經營の學校があり、生徒は月一圓乃至二圓の月謝で凡て賄はれる、加之成績の善い子供は北京へ遊學させられる。此の學校は幼稚園から中等學校まである。外國人としてはアメリカ人の外に瑞典人も居ると。

以上が顧先生の談話の要領である。七時二十分一旦宿に歸り、八時より山崎、盛島、向井、顧先生の諸氏と共にスキ焼をつき、九時皆の

人歸られ、入浴、十時就寢。此の張家口の風呂が又極めて不便な鐵砲風呂であつたが、充分の思出ではななる。

四月十九日、土曜日、晴。五時半起床、六時朝食、張家口唯一の日本旅館、遠からず廢業すると云ふ日本旅館に名残を惜しみつゝ、六時過驛に向ふ。七時二十分張家口驛を去る。盛島、山崎、向井、顧先生の諸氏が見送られる。暫らくの交渉であつたが、此等の諸氏にも名残は惜めて堪え切れない。海外發展の第一線に立たれる盛島、山崎、向井の諸氏よ健在なれ、親身も及ばぬ位親切に世話を焼かれた顧先生よ多幸なれ、何時か又再會の機はあるだらうが、それまではなど考へながら、車窓から領事館にも別意を表して張家口を去る。

十時二十分汽車が下花園を通る頃である、此の邊黃塵飛んで殆んど遠望が利かない。我等が多倫滞在中遭遇した風の擧げた砂塵が今此の邊に來て居るのであらうか。然しながら柳は既に

緑の芽を吹き世は何となく春らしい。胡砂の中に青柳を見るととき本當に眼も覺める様に美しく思ふ。

青龍橋から南口邊の景色は實際繪を見る様で麥と柳の緑が何とも云へぬ美しさである。暫らくの間に本當に春らしくなつた窓外の景色に見入る中、四時二十分汽車は早くも北平西直門に着いた。

荷物の検査は殆んど形式的にあるばかりで、實際心配が大きかつた丈、拍子抜けの體である。五時、一二三館に歸り、蒙古の垢を落して六時夕食、先づ無事だつたやれ／＼と思ふ。新

聞を食り讀み、原田、島村、水野、江上、駒井玉井の諸氏と共に旅行談に花を咲かせた後十一時半就寢、病氣もせず、馬賊にも襲はれず、色々の人々の親切に預かつたことを深く感謝しつゝ静かにねむる。(昭和六年七月二十六日稿)

(附記)

此の旅行中、同行の東亞考古學會幹事島村孝三郎、東方文化學院京都研究所員水野清一、東京帝國大學考古學教室駒井和愛、東亞考古學會在支日本留學生江上波夫、京城帝國大學助教玉井是博の諸氏から一方ならぬ御厄介になつた。實際は此の旅行記は水野、駒井、江上、小牧の四人連名で發表するが適當であると思ふ位であるが、一先づ小牧の名を以て發表する。此の機會に前記諸氏に厚く感謝の意を表する。

伊太利ところぐ (二〇)

瀧川規一

【聖フランシス繪になつた挿話の一代記】

(続き)

ベヴァニヤ(Bevagna)にあつた出來事であるが、聖者は群鳥の集まる處に來ると群鳥は聖